

3つのT（対話・体験・探究）に基づく授業改善  
～子どものいい学びを語り合う「Tいいm」（チーム）の時間～

1 はじめに

本校では、学校教育目標「自他の人権を守り、対話と体験を軸に探究しながら、『在りたい未来』を創造する子どもの育成」を掲げ、目指す子どもの姿を、

【元 気 よ く】主体的に探究することを通じて、学ぶことが楽しいと思える子

【仲 よ く】自他の人権を守る子

【力いっぱい】心身ともに健康で、自らの「在りたい未来」を創造できる子

に設定し、子どもを中心に据えた教育活動への転換を図った。本稿では、研究推進委員会を中心に力を入れた授業改善について、そのポイントを整理し紹介する。

2 研究の経過

(1) 「Tいいm」（チーム）の時間のつくる

授業改善に向けた重要事項のひとつが、リフレクション（授業省察）である。業務改善も視野に入れつつ効率よく行いたい。

そこで、1カ月に1回程度「『Tいいm』（チーム）の時間」を設定した。この「『Tいいm』（チーム）」とは、「3つのT（対話、体験、探究）によって、子どものいい学び（manabi）を語り合う時間」の通称である。流れは以下のとおりである。

I 事前にリフレクションする授業を決め、学習記録を用意しておく。

（学習記録とは、活動写真やワークシートなどを指す。）

II 学年部の教員に3つのTの視点から、自分なりの授業分析を説明する。

III 授業分析をもとに、改善できることや子どもの反応を確認し合う。

本校の3年生以上のように、教科担任を推進する場合、学年全体の子どもの反応を知っておくことは大切であり、それが日々の授業に活きる。「Tいいm」の時間によって、教員は、3つのTを意識するようになったことが成果である。

(2) スクリレを効果的に活用した情報共有

日々の実践にはキラリと光る効果的な手立てがある。それは、教員全体に共有させたい。そこで活用したのがスクリレ（配信アプリ）の利用である。写真と文字で構成したシートを配信した（図1）。

なお、全国学力学習状況調査結果で探究的な学習が必要であることが明らかになった2学

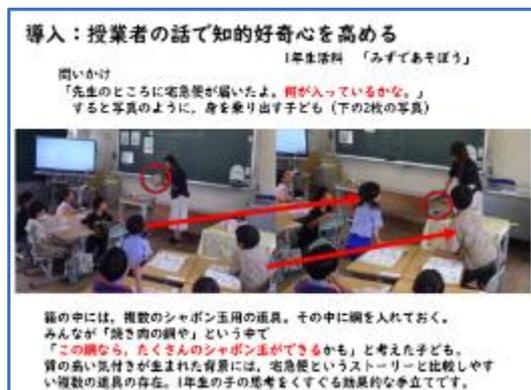


図1 配信内容の例

期以降は、保護者にも取組が伝わるように、学校だよりに 3 つの T に関わる授業を紹介するコーナーを設けて配信している（図 2）。

この情報共有のねらいは、2 つである。ひとつは、授業の意図を知ること、もうひとつは授業内容の価値付けである。前者は子ども理解を中心に据えた教材研究の必要性を感じる機会であり、後者は、知的好奇心を重視することを再認識する機会なのである。

また、子どもの学習意欲が高まることと保護者が学習への関心をもつこととは、親和性が高い。スクリーンを通じて、教員にも保護者にも学習内容を分かりやすく価値付けした記録を配信することは、効果的であると判断している。



図 2 学校だよりの学習の紹介コーナー

### (3) 講師招聘授業でリフレクションの質を高める

教員全員が参加する全校授業のリフレクションは、教員一人一人のリフレクションの質を高める機会であると捉えている。2 学期の講師招聘授業（4 年生算数「面積」講師は市教委指導主事）をその機会とした。

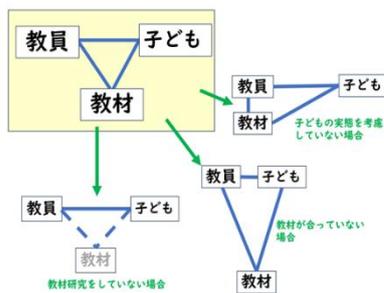


図 4 授業の構成

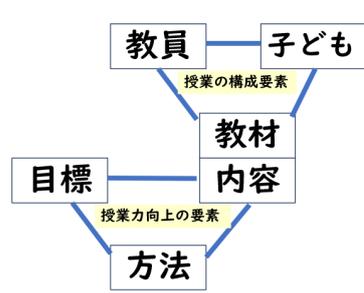


図 4 授業力向上要素との関連

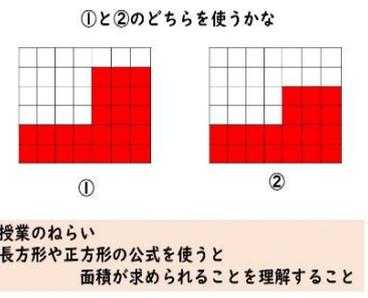


図 5 2 タイプの教材

さて、授業の構成は、授業者（教員）、子ども、教材の三つがうまく結び付いた時に成立する。図 3 に示すように、これらの要素がバランスのとれた三角形にならなかったり、そもそも教材研究がなく、経験知のみで授業を構成し、三角形でなかったりする場合は、授業は成立しない。また、図 4 が示すように、授業力向上の要素との結び付きも教材（内容）が共通点であることから、いかに教材研究が重要であるかが分かる。

そこで、本授業では図 5 の②を用いて行い、授業後のリフレクションでは、教科書が①を取り上げていることをふまえて、それらと比較しながら子どもと教材の結び付きを考えることを目的とした。図 6 が実際の授業の様子である。「面積の公式に当てはめる方法はいくつあるかな」を本時のめあてとして子どもと合意形成を図った後に、予想立てと面積が  $20 \text{ cm}^2$  になることを確認し、自分のペースで探っていく学習展開である。教材研究の段階で、教科書を解説する授業展開になると解答を終えた後で集中力が

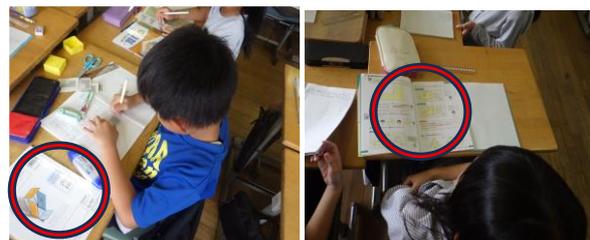


図 6 学習の様子（教科書利用の有無）

切れて遊んでしまう学力の高い子どもと、一方で個に応じた支援を必要とする子どもがいることを想定し、②を選択した経緯がある。図6が示すとおり、前者は教科書を見ずに黙々と解答方法を探っていた。一方、後者は教科書の解答例をヒントで解決方法を探っていた。右写真にあるように、全体で解答方法を共有するステップになっても子どもの知的好奇心が維持できたのも、教材のおもしろさが要因となっている。授業者も教科書(3パターン掲載)には記載されていない四つ目の方法(一部の正方形を移動し大きな長方形として考える方法)に着目した子どもが予想以上に多かったことに喜びを感じていた。



写真 全体での共有の時間

リフレクションでは、教科書の内容分析に長けた講師からの助言を受け、①と②のそれぞれのメリットを再認識できた。本授業は複線型の授業展開のポイントになる手立てを多く含んだ内容であり、有意義な講師招聘授業となった。

#### (4) 年度末のリフレクション(カリキュラムのPDCA)

年度末の『「Tいいm」(チーム)の時間』は、図7に示したようなカリキュラムシートをもとに行う。このシートには、学習の概要とポイントとなる場面の他に、「次年度、深い学びを生み出す学習場面を増やすなら、できそうなこと 意識しておきたいこと」を記入する項目がある。次年度の担任はこれを参考に計画づくりをするのである。従来の実践記録を簡素化したシートであるが、地域学校協働活動(ゲストティーチャーに関する項目)の資料要素も入れることで効果的なシートである。



図7 カリキュラムシート

このシートをもとに教員全体で語り合う時間が、本校の授業の軸となる「3つのT」に基づいた授業改善、そしてカリキュラムのブラッシュアップにつながると判断する。

## 4 研究のまとめ

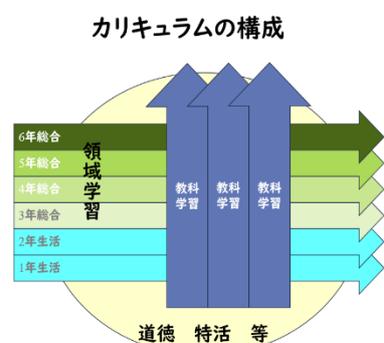


図8 カリキュラムの構成

子どもの多様化を受けて求められる授業も大きく変化している。一方で業務改善も重要である。この二つを同時に進めるためには、これまでの研修の在り方を見直す必要がある。本年度は『「Tいいm」(チーム)の時間』を創設し、質を落とさず効率よく授業改善できる方法を探ってきた。一定の効果は示すことができた。

最後に、図8に示すように、学校のカリキュラムは、三つの層で構成される。教科、領域、道徳や特別活動等である。今後も『「Tいいm」(チーム)の時間』を活かし、三つの層の教育活動を改善できればと考える。